

## 三十三行のメッセージ

夏の暑さも和らぎ、朝夕は爽やかな空気が感じられるようになってまいりました。感染症対策を徹底しながらの学校生活、という、きわめて困難な状況の中で日々奮闘されている先生方に心より感謝申し上げます。困難な時ほど何事も初心に戻って考えてみたくりますが、その考えた成果を先生方に対する感謝と励ましの気持ちを込めつつ、まとめてみました。ご一読くださると幸いです。

学校生活を通じて子どもたちはたくさんのことを学びます。日頃見るとはなく見ている先生方のふるまいからも学びます。教員は何気なく接する場面でも無意識のうちに子どもたちを励まそうとしてしまいます。これは性(さが)です。大事にしてください。毎日を懸命に過ごすうち、ふと気がつく子どもたちはいつの間にか大きく成長し、そのことに教員は驚き、深い感動を味わうのです。

学校で先生方が子どもたちに向かってする話は、内容とともに話し方なども大事です。ホームルームや授業、集会などで話す場面では、声のトーンやまとめ方などの細部にも配慮したいものです。せっかくのいい話も最後のまとめ方次第で効果を削がれかねません。心に響くかどうかは余韻があるかどうかにより大きく左右されます。その余韻は直接励ます以上に子どもたちを励ますと思います。

誰もが孤独の中を生きています。「人から立派だなんて思われなくていい。俺は自分を好きでいたい」。本日の新聞で紹介されていた、ある漫画家の言葉です。自分が人からどう思われているかを気にすることは社会生活を営む上で必要なことです。気にするからこそ向上心も維持できます。しかし孤独という宿命に対しては、それでも落ち着いて頑張れる自分の存在を信じなければなりません。

子どもたちの長い未来の時間は一度に来るものではありません。それは今の自分を精一杯生きていく一日一日の時間の積み重ねです。よい人生というものが形としてあるのではなく、よく生きようとする人生がその努力の過程としてあるのです。将来に備えて力をつけようと先を急ぐのではなく、今の自分の持つ力を尽くすこと、それが新たな力の発揮につながる道ではないかと考えます。

子どもたちは学校で様々な人と巡り会い、様々な経験をします。先生方から様々な言葉をかけられ、様々な指導を受けます。先生方が一生懸命に言葉をかけ、一生懸命に指導したことは、「大切にしてもらった記憶」として子どもたちの心に残ります。それは時間とともに明確な輪郭を失っていくとしても、何かに根底から支えられている感覚として、子どもたちの心に確実に生き続けます。

終わりまで丁寧に読んでくださり、ありがとうございました。先生方の日頃からの熱心なご指導に対し深く敬意を表するとともに、今後も変わらぬご尽力を心からお願いしまして、私から先生方への、ささやかなメッセージとします。

令和2年9月28日

教育長 齊木邦彦